

御伽草子『小敦盛』試論

序

「小敦盛」を読んで気がつくことは、平家の語りにも、ある種の本地物にも異なる別の語りがこの作品に存在することである。それはいかなるものか。また、それがこの作品をどう規定しているか。困難ではあるが、そのような語りの問題にゆきあたる。

やや極論ながら具体的には、平曲の場合、演者と台本と享受者の関係であるが、演者が台本を記憶し、その成果を聴衆に伝えるとすれば、聴衆は二次的存在である、と考えておく。逆にある種の本地物のように演者と聴衆が密接し、台本を二の次とする語り物も存在する。以上は二つの極端の例であるが、この両極端間にあって、性格づけを含め語り物として「小敦盛」をどう位置づけるべきか。これが一つの読後感であった。いま一つ、ここに参考すべき論文がある。それはバーバラ・ルーシュ氏の論文、「世界の中の御伽草子」—⁽¹⁾である。敦盛の息子とハムレットとを比較し、二人の間に洋の東西と時空を超えた心の普遍性と享受者の心をゆさぶる原動力の存在を指摘する、心理分析に秀れた論文であるが、少しく読み方を異にする立場から「小敦盛」を分析することも可能のようである。

語りの問題と前掲論文の読後感から気になつたのは、息子の自我と、その像の大きさもしくは作品中の位置づけの問題である。自我未確立かとの疑問と、作品名から一応は息子が主人公かとも思うではあるが、作品中における息子の自立性とが気になるのである。

白石一美

古く作品内部に死別捨子逆縁など二つの異なる文学世界を分裂氣味に内包し、主題的に主人公の自我が弱いこの作品は（本地物や高僧物として成立展開した可能性も存したかと思う）、文学史的には彼を脇役化する方向に展開したものと私は判断する。息子本位では彼の像が過大評価され、不要の恩讐をうむなど、原作者の意図を離れて、享受者に深い感動を与えるのかと思う。この点、特に気になる。御論の誤読による非礼をおそれるが、参考までにバーバラ氏の論文より一部紹介しておく。母を否定すべきか。

父親はどちらも殺害されている。ハムレットも小敦盛も、父親を敬慕していた。二人とも、父親の亡靈に遭遇している。亡靈との出会いが、息子たちの人生の決定的瞬間であり、その後の息子たちの人生の方向が決定される。どちらの母親も生存していたが、息子たちの悩みを解決するような存在でなかつた。作品における息子の悩みは、自我確立の問題とも関わるのであるが、文芸的虚構であり、この虚構はある目的を達するための手段であり、虚構設置の目的の一は、「母」の悩みを解決し、もつて享受者的心に食い込むところにあるかと思う。以下、二つの読後感をもとに作品分析を試みたい。

【小敦盛】の冒頭付近を次に引く。女が生き難い状況を記す。夫

敦盛の討死の報に接して女が嘆き、平家一門都落ちに男との別れを回想する場面である（関東武士との再婚をからかう敦盛に注意）。

（敦盛討死）いたはしや敦盛、源氏謀叛をくはたて、自らはい

かならん東男に見なれ給ひて、敦盛がことをば、忘れこそ候はんずらんと、たはぶれ給ひけり、又御身はたゞならぬ身なり。

男子にて有ならば、これをかたみに取らせよとて、金作りの太刀、女子にて有ならば、十一面觀音を：（渋川版『小敦盛』）

右の回想の場に、御身云々と北の方の懷妊をクサビを打ち込むよう挿入し、後文との結び付きを緊密化し、死別と今後の出産と、生きるに厳しい状況を設定している。その緊密化は次に引く絵巻系の本文と比較すれば明らかであり、絵巻系では物語の展開が平板化している。（接続詞「また」の用法も素朴である。）

敦盛都を落ちさせ給ひたる、その時の御風情、さもあぢきなき御有様にて、「もしわれ、このたびの合戦に討たれて候はば、東の人見え給ひて、われわがことをば思ひさへ出だし給はじ」などと戯れ給ひ、まことに御名残惜しげなる御有様、たがひに泣く泣く別れさせ給ひつる。また御守りの十一面觀音と、紫檀の柄の刀を、形見とばかり残し給ふ。

（中略）敦盛が熊谷に討たれたことを耳にして北の方は嘆く。）

さても、かりそめの御契りとは申せども、男女夫婦の習ひとて、御懷妊とぞ聞えける。かくて月日を送り（絵巻系『小敦盛』）再婚を仄めかす敦盛の戯れの語、あづま男云々は、平家物語壇浦合戦の知盛の運命予見の言葉「只今珍しき東男をこそ、御覽ぜられ候はんずらめ」、女官が軍を中止し船内を清掃する知盛を批判した処、「今に東国のもがお前さん達の相手になるよ」と言つた言葉を想起させる。が、字面は掛け、本質的には平家物語の「維盛都落」の夫婦別離の影響が思われる。都落ちに際して「自分が死んでも尼にはなるな。再婚して子を育てよ」という言葉を残している。

◎たとひわれ討たれたりと聞き給ふとも、様などかへ給ふ事は、ゆめゆめあるべからず。その故は、如何ならん人にも、見もし

見えて、あの幼き者どもをも、育み給へ。情をかくべき人も、などか無くて候べき……。北の方袂にすがり、都には父もなし、母もなし。捨てられ奉つて後、又誰にかは見ゆべに、如何ならん人にも見えよなど承ること恨めしけれ。……せめては身一つならば如何せん。捨てられ奉る身の憂さを、思ひ知つても留りなん。幼き者どもをば、誰に見譲り、如何にせよとか……

馬引寄せさせ、既に乗らんとし給へば、若君（六代御前）姫君走り出でて、父の鎧の袖、草摺に取りつき、これはされば、いづちへとて、……豪き世のきづなど覚えて（平家物語卷第七）

右の六代少年は北条に逮捕されるが文覚上人に保護される。「小敦盛」の状況は六代以上に厳しい。夫には先立たれ、子供は未だ生まれず、難儀であり、これからさき、どうするか、不安定である。やがて北の方は男児を生むが、「平家の末をば、かたく探し出し、十歳以後は首を斬り、二歳三歳をば水に入れ、七歳八歳をば刺し殺す」、平家物語もどきの源氏の厳しい追及を恐れ、「自ら此若君を取られ、憂き目を見んことも悲しきや」と思つて終に京都の下り松という所に捨子する。以上の状況下に人生問題を設定している。

虚構には「伊勢」15段信夫山の如きためらい即ち恋の進退躊躇を作中人物ひいては読者に委ねる曖昧表現によつて人生のゆらめきを表現する方法などがあるが、「小敦盛」において北の方が敦盛の遺児を捨子したとする設定は誇張的表現による文学的虚構であり、作品以前の素材レベルにおける実情は、法然上人のもとに遺児を託したと見るべきであろう。そのよすがとなる本文であるが、この児は敦盛によく似ているという熊谷の言葉や平家方の人でも構わないから小児のゆかりをご存じないかという法然上人の言葉に窺われるよう、表沙汰にはできないが敦盛の遺児であることを法然関係者が

薄々察しているとする条が絵巻・渋川版ともに、この後方に見えるからである。

以上から捨子は虚構との前提に論を進める。子供は親の顔も知らないまま、親子別々の環境に入る所以、この設定のため、新たに次のような文学世界が可能となる。

1 見ぬ親を恋慕して嘆きつつ生きる子の姿

2 捨子の母であることを告白・懺悔する場の創出

3 父の跡を恋慕し、人生の不条理に迷う遺児の煩惱の世界

捨子は、虚実皮膜風の日常的に実際あり得る設定であり、我子の将来を案じた女のおこないであるが、これにより罪の烙印が押され子の面影は後々まで、物語の最後までまぶたに残る。捨子の経験のない読者の意識の上では絵空なる他人事として映るが、読者の無意識下には自己のさまざま過去の苦い思い出に刻印され、この虚構は心の問題として一举に普遍化され、沈殿される。北の方は荷を捨てて身は軽くなつたが、心はどうか。世間に隠すべきことがらがここに生じた。絵巻には捨子・逆縁混在するが、この捨子の問題は作品の主題にからむところの最初に現れたモチーフと判断される。

二

下り松に捨てられた敦盛の遺児は、折節、賀茂明神参詣のため通りかかった法然上人の手に拾われ、その膝下に育てられる。ある時のことである（①から⑥は一連の文章である）。

①ある時熊谷入道、此小人を見申、さても人多しとは申せども、一の谷の合戦に討たれさせ給ふ、敦盛に、此児少しも違ひ給はぬ不思議さよとて、つねに涙を流し給ふ。

②さて此児のたまふ様、「われは父母もなきみなし子にて有けるを、上人とりあげさせ給ひて候」と申されければ、

③近づく法師このことをとがめばやと思へ共、今更命失ふに及ばずして、斟酌しけり。

④扱若君涙を流し仰けるは、「余の小人には父母をもち給ふが、自らはいかなるらん、父母ともになりけるぞ」とて泣き給ふが、④上人の御前へ参られて、扱も自らはいかならん、父母とてもなかりけるとて臥し沈み泣き給ふ。

⑤上人涙を流し（愚僧の言の葉を父母と思うべしと慰める。）

⑥若君聞召、あら父母恋しやと臥し沈み、湯水をさへ呑給はず：

（湯水断絶すること七日、干死を思わせる。以上 渋川版）右には父母恋しを羅列する觀があり、読書上、クドいと思われる。

②「さて此児」以下は「父母恋しの思いに死に至らんとした」と一筆のもとに片付け得るからである。語り物のクドキもかくやと思われる条であるが、かくクドい表現の目的は抒情文芸として作品中の北の方ひいては読者の心情に深く食い込み、その行動を促す役割を担うが、平曲の口説との関連は未詳である。

さて、文中、注意すべきは③近づく法師のとがめの箇所である。日本古典文学大系本「御伽草子」の該当箇所の頭註に、ちごへのとがめを次のように記す（括弧内もまた原註）。

以下、意味がはつきりしない。まわりの法師が、児の両親のこと（父が敦盛であること）を、とがめだてしたいと思うけれど、（敦盛の子ならば殺さねばならないが）今更殺すまでのこともないというので、さしひかえていた、という意か。

御指摘通り文意不通であり、前文①②と③は文脈に円滑を欠き、③が浮き上がり、③自体、腰折文である。不通の原因を考えるに、全体として父母恋しの羅列の中に、③クサビを挿入句風に打込み、展開に変化を与え、平家の子孫を読者にチラリと仄めかしているが、表現上の限界（遺児の素姓を暴露すれば物語が頓挫する）と作者による別の意図が介在する模様である（不通それ 자체はいかんともし

白石一美

難いので③を独立の挿入句として処理したい)。

作者が③を入れた意図は、北の方の心に決意を促すためと思う。

この一句は彼女の心に実に重くのしかかる。更に告白を促すため、

ここには、文章表現上、一瞬チラリと見せる表の意味と裏の意味と

が存在するかと思う。真にとがめられるべきは罪であり、罪は前段

の子供に無く、熊谷は児の事情を知らない。この場の水面上に彼女

は表だって現れないが、行為をとがめられるべきは北の方であり、

彼女が水面下の主人公となつてゐる。渋川版の特徴の一つは場の背

後に北の方を潜ませてゐる点であり、近似例は生田の段にも見える。

以上をふまえてクドい表現の意義を今一度考えてみる。③を除けば、あとはあたかも歯の痛みの如き本文である。痛い、痛い、痛い

と痛みの信号が脳に送られ、人は受動的になり、どうするか(迷い

と決断)、歯科医へ行く(行動)。クドい表現も全く同様であり、子

が実際に激しく泣いて揚句に死なんとするが、どうするか。ここは

「罪もゆるす、子の命もとらぬ」と女の判断と告白を迫つてゐる箇

所のように思われるるのである。(子の处置は女ののみ可能)

以上、文意不通箇所の分析から父母恋しの場における北の方の、

作者と地の文と読者の三者間における彼女の位置を確認した。

なお、⑥湯水絶ち云々は誇張による虚構かと思われる。素材レベルにおける実情は、法然上人保護の環境下における不適応かと想像される。つまり、親の不本意な愛情不足から法然学院においてイジイジしていたものと思う。しかし、イジイジ程度では女親に強烈なインパクトを与えないもので、かかる大袈裟な誇張となつたものであろう。ちなみに③近づく云々の場面は絵巻系に無く、代わつて次のようないじめが描かれてゐる。

さても、この少人、同じやうなる稚児たち集まりて、弓遊びし

給ひけるに、ある稚児、勝ち負けの争ひをして、のたまひけるは、「父母もなき孤児がわれわれに向ひて、口をきくことよ。

上人取り上げさせ給ひてこそ、かくはあれ」とのたまへば、悲しく、口惜しくや思ひけん、弓矢を捨ててぞ泣かせ給ひける。そぞろに親を慕い、親心を誘う表現はみえるが、前掲渋川版の如き水面下の女性はここには顕れていない。

三

若君は父母恋しと嘆いて湯水を断ち死にそうになり、法然上人がゆかりと思しき者の有無を弟子に尋ねると、熊谷が説法を聴く人々の中に該当者と思しき女性がいると答える(渋川版の熊谷はここで物語中より退場し、以後、登場することはない)。法然は説法を始めて捨子の発見・養育このかたをしかじかと語り、聴聞の人々に

この聴聞の中に、行方をしろしめされたる人や御入候。幼き者に行方を知せて給はりたる事ならば、何かは苦しかるべき、明日になり、六波羅へ聞え、平家の末なればとて、殺し給ふとて

も苦しからず、行方を知せて心やすく殺してたび給へ(渋川版)と尋ねると、一人の女性が名乗り出て、自らの素姓と敦盛とのなれそめ、形見のこと、やむをえず捨子した経緯を告白する(告白の言葉の中に物語の冒頭部同様の詞章が繰り返されるのは、既述の物語内容の忘却に備えた語り物文芸的工夫かと思う)。

さる程に若君、母のなごりの声を聞しめし、仏神三宝の加護される。つまり、親の不本意な愛情不足から法然学院においてイジイジしていたものと思う。しかし、イジイジ程度では女親に強烈なも涙、先立つものは涙なり。(蘇りには説法や語り物を聴聞する様々な人々の事情に対する配慮があるか、とも想像される。)

こうして白日のもとに母子は再会をはたし、名乗りと告白の結果、過去を引きずってきた北の方の心は軽くなり、罪はうすらぐ。捨子と告白と、以上は北の方のおこないに属することががらであったが、後には彼女自身、故人と遺児を映画のスクリーンを見るよう

に静かに観照する立場となる機会が現れる（後述第六節）。

熊谷の扱いに関する絵巻と渋川版の相違であるが、絵巻では母子再会の場に熊谷も対面し、敦盛の最期の模様を語つて遺品を母子に示し涙する。即ち逆縁を結んでいた。それゆえ若君は父敦盛を思い始める次第であり、物語展開は滑らかである。渋川版では法然説法の前に熊谷を消去し、母子再会の涙の場に筆を結び、言わば第二幕として亡父恋しの筆を新たに起こす。若君が敦盛の名を耳にする事が無く、プロットが途切れがちであり、逆縁即ち仏教性が薄れている。渋川版が熊谷を早くに消去した理由であるが、物語享受の心理上、熊谷が敦盛の首を取つて北の方の嘆きの種と、北の方が敦盛の子を捨てて遺児の嘆きの種となつたので、心の奥深く完全には癒し難い熊谷憎しとの思いを生ぜしめぬため早くに消去したかと思う。既に恩讐を越えて逆縁を結ぶ三者対面の場が無いので渋川版は絵巻に比べて相対的に現実色が濃くなつていて、かく絵巻系に仏教色が、渋川版に現実色が濃い例は他にもあるが略す。このことは成立期や成立圈、享受者層の広狭さらには特定読者層への絞り込みの問題に関わるかと思う。

四

母や師匠のもとを密かに離れて一の谷へ行く段の梗概を次に記す。
 ①若君は密かに賀茂明神に参り、父との対面を祈ると、明神より津の国生田へ行けと告げられる。②草深く風雨きびしい中を難儀な人生を歩むように辿り辿りして一の谷へ道行きすると、灯火かすかな御堂あり。③若君は敦盛の遺児と名のりし、來意を告げて一夜の宿を求める。④堂の人こそ父であった。父の膝を枕にまどろむうち、敦盛の亡靈は消え去る。⑤目がさめると父の白骨あり。若君は骨を首に掛けて泣々帰京し、法然（渋川版は母）のもとに着く。

以上が敦盛父子対面の段の梗概である。絵巻系は⑤道行における心情・⑤松風に漂う孤独感・③源氏の世ゆえの名のりの躊躇に筆をさき、渋川版においては④堂中の父子対話（絵巻系 対話なし）、就中、父母を思う子の孝心と妻子を思つ敦盛の迷いに重点をおき、④以外は相対的に縮約化するが、両者ともに重要な一段である。この生田の段全体の趣旨は、故人の人生は不本意にして不条理、若君も然り、そうした不条理ゆえの迷い、この迷いに妄執を（強く断ち切るべしと言うが）消し去つて、父とは別の一の独立の人間として生きてゆく、若君の人生の目的の端緒を示すにあるかと思う。そのことを絵巻系は父の言葉による教訓を中心に、渋川版は搖れ迷う親子の対話と行動に纏げに示すものようである。

（絵巻の描く世界を次に概観し、渋川版は次節に考察する。）

絵巻系に御堂の中における父子対話の場は無く、父の膝にまどろんでいる中、父が夢に現れて「高僧になれ云々」と教訓する。

④ 汝は見もせぬ親を、かほどまで恋ひ悲しみけることの無惨さよ。孝行の志まことに切なるにより、ただ今まぼろしに来たれるなり。汝いまだ母の胎内にありし時、この播磨渚にて、年は二八の春の頃、熊谷の手にかかり討たれしなり。われを思はば孝養に、いかにもよくよく学問をして、大智者となり、広く衆生を濟度あれ。それを嬉しと思ふべし。（二×八二六歳）

広く人々を指導せよ、それが供養にもなる。父の希望は現実に向かっているのである。夢がさめると、み堂は無く、すすき・あさじの草むらに骨が一つ残っていたという。無常の常である。

⑤御袖に取りつかんとし給へば、夢はそのままぞ覚めにけり。あさましやとおぼしめして、あたりを見給へば、御堂と見えつるは梢を渡る松風なり。敦盛と見え給ひしは、薄、浅茅に乱れたる露ばかりなり。さて御膝を枕にせさせ給ふとおぼしめしつる

は、白くされたる膝の骨の苔むしたるが、叢の中に残りたるばかりなり。若君はあきれはて給ひて、のたまふやう、恨めしや父御はいづかたへ帰り給ふらん。われをも連れて御いりあれ。など草深き松がもとに、一人は残し給ふぞとて、伏し沈み泣き悲しみ給ふぞあはれる。

御堂は無く、一樹の下に伏す若君の姿がある。若君の人生の目的は措き、仮にこれを金錢とすれば尾崎紅葉の「金色夜叉」に通じ、高利貸鰐淵の焼跡に悄然と佇む手代間貫一の姿に重なるかと思う。

こうして父への迷いの結果、もたらされたものは骨一つであり、骨が幽界と此界を媒介し、この先は仏教の世界となる。

その世界を考える資料に幸田露伴の「対觸體」（旧題「縁外縁」）がある。骨一つを媒介に彼此両岸の世界を描く超自然的作品である。奥日光の山越えに行暮れて旅人一夜の草の宿を求め、あるじの女がその過去即ち恋愛や別離など人生の諸問題を細々語る中に夜が明ける。物語末尾近くを次に引くが、この中ほどは難解である。

（前略）時しもあれ朝日紅々とさし登りて家の人も雲霧と消え、枯れ残りたる去歳の萱薄の中に、雪沓の紐続ぎかけしまま我たゞ一人にして、足下に白觸體一つ。見て知らざるの事、聞きて知るべし。聞いて知らざるの事、思ひて得べし。思ひて得ざるの事、感じて得べし。我彼を憐めば彼我を愛す。相憐み相愛すれば、彼の中に我あり、我の中に彼あり。彼我間隔無ければ、情意悟るべく境界会すべし。幽谷の觸體、孤客の今的心を牽きて、深山の孤客、觸體の前の生を観る。值遇の縁ありて擲拋の意無く、一夜相守る一樹の蔭、一河の流の水向に、梓の神の弓ならで心の絃の響に憑りし其の亡靈の、逝つてたゞ塊然として残りたる觸體を埋め納め終り……⁽²⁾

露伴の後書き（「縁外縁の後に書す」）より次に抄出するが、現実の世界を超えて、彼岸から此岸を照射し、人生における人々の汲々

たる営みを余裕をもつて俯瞰する趣きがあり、参考資料となる。

（前略）其上に君無く其下に臣無く、朋無く仇無きは、これ觸體の樂にあらずや。（中略）それ造物の不仁なるや、人を劣するに形を以てし、人を苦むるに生を以てす。（中略）唯觸體に至つては即然らず。既に超然として造物の樊籠を脱して其の労苦するところとならざるのみならず、却てまた莞爾として、造物の不智にして自ら勞し自ら苦み、嘗々汲々として人をして怨嗟せしむるを笑ふに似たり。……⁽³⁾

五

第四節にも比較したが、渋川版は生田の堂内における④敦盛父子の対面の場に山場を設定するので、次に④この山場を見る。水面下の北の方に対する作者の配慮は第二節にも見たとおりであるが、仏教色がやや薄れる代わりに人情味濃く、④ここでは母に対する思いやり即ち孝心が強調されている。

渋川版における④対話の部分は、作者の筆が省筆氣味であり、客觀化が不十分である。先学がその読解に難儀されている箇所でもあるので、まず本文の文法的解釈から入りたい。以下は堂内における父子の応答の場面であるが、分かり易きを期して予め謡曲「生田敦盛」の該當箇所を引く。

明神あはれみおはしまし、閻王に仰せ遣はさる、閻王仰せ承り、暫しの暇を賜はる、親子の契りも今を限りなるべし。

渋川版において敦盛が己れも迷いつつ子の妄執を徐々に断ち切つてゆく場面を次に引く。文中、第一文は主客の変化などから前掲謡曲に比べて屈曲し、やや舌足らずながらも文意は一応通じる。

賀茂の大明神あはれにおぼしめして、閻魔王に仰せありて、刹那の暇を乞ひて、今汝に見ゆるぞ。かまへて今より後、わがこ

御伽草子『小敦盛』試論

とをかほどに思ふべからずとのたまふ。若君仰せけるは、閻魔王に仰ありて、自ら御前に参るべし、父は是より都へ御上りありて、自らが母に今一度見えさせ給へと申されければ、文中の若君「仰せ」は語義を厳格に適用すれば不用意であり、「のたまひ」・「申され」等とあるべき箇所である。問題は若君が父に命令（言葉が不適当であれば命令ならぬ勧説）する語はどこから始まるかである。日本古典文学大系『御伽草子』の当該箇所の頭註は閻魔王からとみる。その註を次に引く。（私見では閻魔ならぬ父からと見る解釈も成り立つのではないかと思うのであるが……。）おつしやつて。お頼みになつて。「自ら…べし」は挿入句のようなかたち。私が父上の代りに閻魔王の御前に参りますから、父上は：私の母にもう一度お会い（姿を見られて）下さい。注釈として妥当かとも思うが、ただ難点として、挿入句を除外しても前後がなだらかに繋がらないこと、また挿入部分を奥に埋没させず孝心を表に表現すべきではないか、これらが挙げられる。個人的解釈であるが、「閻魔王に仰ありて」は父の言葉のオウム返し、「閻魔王に仰ありて」とおつしやいますか。私が地獄の閻魔王の御前に参りましよう。父上は是より上京云々

と解することはできないであろうか（事情—判断—命令）。オウム返しにより、後文にクサビを打込み、前後緊密化を図つたかと考えられるのである。

参考までにオウム返しの例を次に挙げる。傍線部がそれである。後文の中にオウム返しにクサビを打ち込むように三つの発言を二つに縮約するが、絵巻は三つを平面的に展開している。

③若君、「物申さん」とのたまひければ、この人、「誰そ」と答へ給ひ、「このあたりは人も訪ひ来ぬ所に、いかなる物にてあるぞ」とのたまへば、若君泣く泣く……（絵巻）

④「物申さん」とありければ、「たそや、この人も住まぬところ

に、物申さんといふは、いかなるものぞ」と（渋川版）以上④には、父子対面をはたし、更に両親の再会を願う子の孝心が見える。水面下の母親を前面に出すのである。直後を次に引く。敦盛御涙を流し宣やう、あらむざんやな、生れてよりしてこの道は、さなきだになごり惜しきならひぞとて、髪かきなで、涙を流しの給ふやう、若君は、さてこれより都へは上るまじきとて、流涕こがれ給ひけり。（渋川版）

文中の「この道」は前述大系本に次のように註せられている。

死出の道。死別の道。死んでゆくこと。親子夫婦の別れをいう。しかし、これは前文の子息の命令もしくは勧説の言葉に緊密に対応しないかと思う。思うに、古典諸作品において死出の山・死出の山路などの文献的用例は確認可能であり、それらの用例から死出は越えるべきものと判断される。思うにここは恩愛の道ではないだろうか。親子夫婦などの切るに切り難い愛情の迷いである。

○父子恩愛の道、今生一世の契り、今を限りと……（保元物語）○恩愛甚だちがたく生死はなはだつき難し（親鸞『三帖和讃』）

【徒然草】（142段）より今一例挙げておく。

○ 心なしと見る者も、よき一言はいふものなり。……子故にこそ、万あはれは思ひ知らるれと言ひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子を持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。

渋川版における生田敦盛父子の別離の条を次に引く。

（若君が膝枕の睡眠中に）若君の左の袖に一首の歌をあそばして、投げきては帰り、帰りては行、なごりをぞ惜しみ給ふ。さてあるべきにあらざれば、かき消すやうに失せにけり。や、ありて若君起き上り給ひ、父に抱きつかんとし給へば、ありつる堂なり。（若君、父の膝の骨を見いだし嘆く。）

生田の段における絵巻・渋川両者の相違点を素材的にまとめる。

仏教方面であるが、ともに父の骨一つが残った点は同一であるが、この考え方を徹底すれば、渋川版は絵巻のように御堂を消し去るべきではなかつたか。また、「高僧になつて」云々とは絵巻における若君の将来を仏教に限定する父の言葉であるが、人生指針の明言は渋川版にはなく、「まことに汝心ざあらば、善根をして、敦盛が後生に得さすべし」との一般的孝養の語が曖昧に残されるのみである。次に北の方であるが、絵巻では彼女は生田の場に全く登場しないが、渋川版では若君の発言を介して間接的に現われ、前述の如く母に対する孝心が強調されている。

第三に絵巻・渋川版とともに父は和歌を若君に残すが、渋川版においては、和歌は、若君が生田でまことに敦盛の亡靈に對面した証拠として都の母の前に示され、そぞろに涙をさそう機能を負うが、絵巻においては一場面の内部に完結する和歌としての存在以外に格別の機能を見いだし難い。なお、この証拠は絵巻における熊谷逆縁の遺品の消去転用かとも思うが、絵巻にも和歌が存し、未詳である。

なお、素材レベルの話材との関係であるが、話材の方向から文芸的成立に僧侶の語りの関与は否定し難いが、絵巻によれば遺児は後に出家した由であり、戦没地における後年の読經供養を、いとけなく、そぞろに涙を誘う幼年時に移動し、幼年時、法然学院における不条理・不幸な愛情の不足に起因する環境不適応行動―学院無断外出の如きーに習合したかと思うが、なお想像の域にとどまる。

六

白石 美

(帰京)さて御歌を母御前に参らせられ給へば、敦盛の日ごろあそばしたる御手なり。別れの時の御おもかけ、今見るやうに思はれて、二度物を思はする、嘆きの中の喜び也。(渋川版)
若君の帰京後、母は泣き、一つには喜ぶ。生田の場は母にとつて

映画のスクリーンである。以前、捨子と告白と、女の行為行動を描いたが、ここでは生田における亡き夫と子の応答を客観的に觀照している。私(ひいては若君)のことは忘れよ、換言すれば恩愛断つべしとの敦盛の言葉をかみしめたものと思う。生田は作品全体のピクをなす場面であり、夢幻的・浪漫的雰囲気に包まれており、文芸思潮上、以前とは異なり明らかに非写実的である。しかし、画面が過去に重なつて涙でボウとなるにせよ、不思議と写実的に心に刻印され、この点、却つて効果的な構成手法である。

この後、北の方は出家する。若君の扱い方が絵巻と渋川版では異なるので次に両者の本文を引く。物語もほぼ終わり近くである。

◎ かくて若君は、御出家ありて、いよいよ年を積み、学問の奥義をきはめ給ひ、西山の善慧上人とぞ申しける。孝行の志深く

おはしまししによりて、御流れの仏法の、今の世の中に繁盛するこそ有難けれ。(絵巻 以下末尾に続く)

渋川版では様相が異なり、北の方本位に物語が展開する。

◎ さるほどに北の御方は、よく／＼物を案じ給ふに、(出家記事あり)、花の袂を、墨染の袖となし、若君をかたみに見たくは思へ共、見れば中／＼物うきに、法然上人へかへさばやとおぼしめし、憂きことにもた憂きことを思ひ続けて、泣く／＼こそ別れ給ひけり。(渋川版 以下末尾に続く)

再び若君は法然上人のもとに捨て子ならぬ委託のかたちで戻る。捨子このかた別れまでを一つのボックスと考えれば、このボックスの中で、若君に悩まされ悩み、北の方ゆえに子もまた然りであり、種々のことがあつたけれども、ここに再び母のもとを離れてゆく。

(若君の巣立ちであり、北の方には自立を意味するかと思う)
このボックスの終端部から入口へ物語はある意味で原点回帰し、グルグルめぐりの発振状態となつてゐる。第一節末尾にモチーフに

ふれたが、それは入口に位置している。ボックス中ほどに生田行きの秘密裡の行動（師匠や母との別れ）をも含めれば、初端・中ほど・終端と、都合三度、モチーフが現れている。

図式的ながら渋川版を構造的に見れば、物語の冒頭部に人生上の問題設定が位置し、これがボックスに取込まれて混合・変調され、最後に終端部より取り出されて物語末尾において読者の前に自身の問題として投げかける、という構造図式と判断される。

物語前半に見え隠れしていた北の方は物語末尾近くなつて全面的に表に現れる。なぜ彼女は若君を法然に託したか、これは前述のスクリーンやボックスから明らかであり、動物の巣立にも勝る、きのう今日とも予期せぬ早期の捨て子であったが、七歳児には七歳児の、五歳、三歳児にも相応の自立があり、思うに叶わぬ子の自立を、換言すれば北の方自身の自立を促すものと判断する。

絵巻は若君の将来の人生を仏教に限定したが、渋川版の若君の今後即ち法然学院卒業後は定かでない。これは、文学史的には仏教全盛の中世より近世への流れ、読者層の多様なニーズに応えたものと思われる。以上、渋川版のモチーフやテーマにもふれたが、教育問題に及ぶ語り物・物語としての「小敦盛」の一側面を見た。絵巻・渋川版両者の作品末尾を次に引く。

◎これを御覽せん御方は、父母、師匠の御事をねんごろに、忠孝をいたし給ふべきなり。誠に誠に有難かりけることどもなり。

御念仏を御回向あるべく候ふ。あなかしく。（絵巻）

◎かくて今ははや、わが身ひとつに成給ひ、いつまで物を思ふべき、いか成淵瀬へも身を投げばやと思へ共、柴の庵を結び、敦盛の菩提を弔ひ、御骨を納め水を手向け花を折、行ひすましてつみに往生をとげ給ふ。いよ／＼是を見る人々、よく／＼後生肝要なるべきなり。（渋川版）

◎此物語を聞く人、まして読まん人は：（渋川版小町草子）耳への配慮は江戸期にすら存し、まして室町に於てをやである。平安文芸的草子地は別として、ここで語りの問題に一言したい。

「小敦盛」の結末部分における語り手（作者）と台本と享受者、三者の関係であるが、見られる如く作者の意識は全面的に享受者に向き、「これ（是）」即ち既述の文章世界は二の次となる。

序論にも述べたがA琵琶法師が台本を一字一句間違えず厳密に習得し、その成果を聴衆に披露する場合、聴衆は二次的存在と考えられる。逆にB語り手がアドリブ・即興語り風に聴衆に接近し、台本は軽いと判断される語り物も存在する。御伽草子の「諷訪の本地」などはこのBの例である。

前掲の「小敦盛」の結末部はB享受者に接近し、「これ」は等閑視されてしまうであろう。語り物即ち音声文芸の実情はこのA B間に存するものと考えられるのである。

「小敦盛」の前半において法然学院に遺児が父母恋しと泣く場面、前にも述べたが作者は、突如、北の方の告白を配慮・期待している。これは視点人物の変換即ち語り対象の移動であり、作者（語り手）はA B間にゆらいでいる。その他細部の々々は略すが、これを視点の問題として確認しておきたい。（蛇足ながら、結局、わが身云々は北の方のみならず享受者自身に重なるかとも思われる。）

なお、視点の問題は漱石（「こゝろ」の大学生や「行人」の弟・猫その他の語り位置）・藤村（例えば「春」の描写視点など）・潤一郎（例えれば直哉との比較上、主として源氏物語風の難儀な文体を含めて）などにも若干関わる面があるかとも思うが略す。

てみたい。両作品は捨子を発端に女が出家する点に共通性がある。

『和泉式部』の梗概と末尾付近の本文の要所を引く。

遊女和泉式部は十四の春に橋保昌との間に若を一人もうけたが、「あひの枕の睦言に、はづかしとや思ひけん、五条の橋に」形見を添えて捨てる。その子を「町人拾ひ養育して、比叡の山へ」あげ、後、道命阿闍梨となる。道命十八歳のおり、和泉式部に一目惚れし、和歌を贈るなどして終に式部と契りを交す。女は自分が捨てた形見を道命の持ち物に発見し、これを我子と知り、そのまま出家する。

◎こは何事ぞ、親子を知らで逢ふ事も、かゝるうき世にすむ故なり。是を菩提の種として、都をいまだ夜深に出て…

(播磨国書写山へ上り、出家して性空上人の弟子となる。)

ともに捨子に起因する出家譚であり、阿闍梨となつたわが子が母に会うことなど近似性があるが、式部は畜生道を機縁に出家する。

【小敦盛】と【和泉式部】に共通点はあるが、両者に対応性をもたせるか否かによって論がわかれ。まず、前者から考えれば、捨子の対応はよしとせよ、前提が異なり、なぜ捨子せねばならないか。

【小敦盛】の場合には人生問題、文学的問題の設定が存在したが、【和泉式部】は遊び事の結果であり、真摯な問題設定は見られないようである。次に、子が女のもとに戻った箇所、式部に対応させれば、若君と北の方の親子生活が始まり、女は若君に愛情を注ぎ、前述の子の自立が阻害される。つまり、その年齢相応の者として社会の不適応者となつてゐるわけである。それを母が悟つて子を法然のもとへ云々と物語を進めざるを得ない(骨などのため【小敦盛】における北の方は、親子生活を描くまでもなく既に悟つてゐる)。

次に否、すなわち両者不対応を前提とすれば、和泉式部は浮かれ女に起因する罪を二度重ねてゐるので、我が子発見の時点をもつて人生問題の設定点とみることができる。しかし、その推進は、前掲

【和泉式部】引用本文の傍線部に見られるように抽象的言辞にとどまり、なされていないようである。

読者の視点から両作品を見ると、和泉式部は文学史的にも知名度が高く、和泉式部に接する読者はもとより他山の石として客観的に彼女を眺める立場にたつかと思う。(尤も「遊女」ぶりから、御伽草子の【小町草紙】同様、読者が和泉式部に一体化する読みを否定するものではない) 他方、北の方はほとんど無名の存在であり、知名度は皆無に等しい。ゆえに読者は普通の悩みをもつた女として、自身の問題として一体化する読み方ができるのではなかろうか。

思うに【和泉式部】は【小敦盛】との共通性を有するが、全体に色調が明るく、そのメインは道命が式部に契りを結ぶ過程にあるものと解せられ、【小敦盛】と同一の問題意識もしくは視点による読解は困難かと思われる。【和泉式部】の正面すべての読解には別の視点が必要かと考える次第である。

次に謡曲【生田敦盛】と【小敦盛】との関連に一言したい。謡曲の字句を検討するに、物語の現在時点の若君の年齢を十歳(【小敦盛】は八歳である)とするなど、一部、異説も見えるが、相対的に絵巻よりも渋川版に近似すると判断される。謡曲と御伽草子を比較するに、前者においては北の方の扱いは軽くほほ名のみの登場であり、熊谷は登場しない。謡曲では父敦盛祈請の若君の賀茂參詣の満願の日に物語が始まり、その序でにこれまでの事柄をごく簡単にふりかえり、

説法の後このことをおん物語り候へば、聴衆の中より若き女性立ち出でて、わが子にて候ふよし申され候ふほどに、密かにおん尋ね候へば、ひと年一の谷にて討たれ給ひし、無官の太夫敦盛の忘れ形見にてわたらせ給ひ候、このことを聞こしめし、父の姿を夢になりとも見せ給へと祈誓申すべきよし……と扱れるにとどまり、以後、北の方が登場することはない。生田の父子対面が全体の七・八割かたを占め、亡靈の消失に物語を結び、

生田以後の場を描かない。さらに異なる点は、謡曲における敦盛の亡靈が軍体で現れることである。平家の谷の回想や猛火の劍火花散る修羅道の苦を遺児に語るための装いかと思う。苦に別れ、子に別れてゆく亡靈の迷いがメインと思われ、恋愛綿々たる『小敦盛』とは異なり、父を中心とする意志的世界を志向しているものと判断される。

【小敦盛】と似た面⁽⁴⁾をもつ作品に『六代御前物語』⁽⁵⁾があり、その比較を試みる。後者は、平維盛の遺児は北条に逮捕されるが、文覚上人の援助によつて釈放されて、都に帰り、母や妹とも再会を果たすが、これはひとえに長谷觀音の利生也とする粗筋であり、成立的には、平家物語の維盛説話と卷12末尾の三つの説話の中、最末尾の「六代斬られ」の章段を削除して主人公の悲劇を描かず、共通する字句を有する平家滝頂巻、その終末部の建礼門院の侍女の往生を六代の従者斎藤六の一期に置き換えた形態を有し、既存の平家より抜書して再編集した観のある物語である。若君の処遇に似た面はあるが、捨子の要素は無く、逮捕の際の母の身代りの申し出や末尾の妹君の長谷祈願など異なる面も多く、本質的には父母恋慕ならぬ長谷觀音の靈験が眼目であり、いかにも神仏本位の鎌倉時代の物語である。従者の存在と若君の人生の神仏運命委託と、この点、仏教的要素は残るが近代的人生問題を設定する『小敦盛』と明確に異なる。

結びにかえて

絵巻系統と渋川版系統の関係であるが、その内容から前者には例えば説教の場における老若男女を問わぬ広汎なマルチユース的語りの反映があり、この配慮は例えば『諏訪本地』の兼家系本に通うものであるが、渋川版は読者を女性層に絞り込み、視野を限定した観があり、その眼を介して世界が焦点化されていると言える。

絵巻は①敦盛・②熊谷・③遺児・④北の方など各登場人物に渋川版に比べて相対的に均等に筆を割く。諸人物中、①敦盛を強調すれば謡曲の如きジャンルに変化したはずで、また、②熊谷の強調は殺害・捨子・不適応の三者告白即ち『三人法師』的世界を創作し得たはずである。現存絵巻は③遺児を中心におき、神仏本位の『六代御前物語』を人間本位に継承発展した観がある。さらに北の方は一つ年上の姉さん女房とか後年の出家など稍詳しい事情を知る絵巻の作者ゆえ成人より晩年に至る一生を記し得たとすれば、高僧物・本地物としても造形可能のはずであった。

しかし、現存の絵巻は七・八歳程度の幼児を中心に据えている。その一因は、父敦盛や六代ほどの知名度と人生波瀾の欠如にもあるかと思うが、主人公としての自我の面で物語的に弱いようである。かりに物語構成を序・展開・帰結の三段とした場合、展開部に、例えば桃太郎鬼退治の如き常人に卓越した偉大なる事業なり大きな困難の設定が要請される。その克服が読者に感銘を与える。しかし、『小敦盛』には無い。展開部は幼児の嘆きと迷いがメインである。

なぜ作者は幼児を中心にはじめて、かつそれを有効と考えたのか。

思うに絵巻の作者は逆縁を考慮したものと判断される。年齢がその手掛かりとなる。現在、若君は八歳であり、これは父没年の誕生として熊谷出家の年の現在に一致する（翌年生ならば七歳・満算）。熊谷は、出家後、鎌倉や高野山にも赴き、つねに法然の下に居たわけではないが、若君25歳の時に68歳で没した。それゆえ青年と老人の対面の可能性もあり得るが、作者は対面し得る最小年次に引き下げている。熊谷と全く罪なき若君を対面せしめる設定であろう。前述の如く熊谷が北の方の嘆きの種と、彼女が若君の嘆きとなつた。恩讐の彼方とは言え青年時の対面は父の仇との意識を生み、また、生田の段などむしろ幼時が効果的であった。それこれに対する絵巻作者の配慮が異例ともいうべき幼時の設定を招來したものと思う。

かくして主人公は自我形成以前となり、卓越した事業の達成は困難であり、もっぱら、いとけなく涙を誘う存在として造形せざるを得ず、六代御前同様に周囲が若君をもりたてざるを得ない所以であり、ここに中心人物が④北の方に移る一因が存したものと思う。

前述のように絵巻の各人物はやや均等的であるが、これは、老年層や若年層など、説法の聽取者層が老若男女広範にわたる反映かと考えられる。各階層の興味に対する配慮は例えば「諏訪本地」兼家系本にも見られるのであるが、その弱点として人物が分散的・平均的にならざるを得ない。その文章展開における類例を前に第一節初めの傍線部に見たように、絵巻にはやや平板な面、個々の事件を描いた一枚一枚の札を重ね合わせることなく平面的に羅列して物語展開した観がある。それゆえ作品の彫琢、全体としての調子の上げ下げや緊密性に欠ける難がある（尤もこれはロール状に巻かれた絵を見る行為とも何がしか関わるかとも思うが……）。

かかる難点を克服して、表面には敦盛や遺児を活躍させるものの実質上の主人公を北の方一人に焦点化し、場面的にも相手の心の中にもクサビを打ち込むように、個々の事件を描いた札を二つ折して組重ねるような方法を採ったのが渋川版であつたと考えられる。読者は北の方の眼を介して世界を見、人間心理の普遍的なものを見たものと思う。ただ、渋川版においても中世的仏教文学の枠組みは厳然として存在するものの、熊谷の逆縁の消失その他、仏教色が絵巻に比べて退歩していることは否み難い。渋川版における児童教育文学的一面を前に見たが、仏門に入る稚児のかわりに、仏門から飛び出てきて、さて、これから社会において活動する子供達の姿が彷彿され、それは読者層のニーズでもあつたかと思う次第である。

予め課した紙幅もほぼ尽きた。僅日に輻輳して筆を尽しえず文学史の一隅の提示にとどまつたが、あとは大方のご批判に委ねたい。

依拠テキスト

- 1 絵巻系本文 松本隆信校注新潮日本古典集成「御伽草子集」所収「小敦盛絵巻」 昭和55年 新潮社
 - 2 渋川版本文 日本古典文学大系「御伽草子」所収「小敦盛」 昭和33年 岩波書店
- (1) 「図説日本の古典 13 御伽草子」所収 一八一頁—一八九頁
 (2) 「露伴全集 第一巻」所収 一六四頁—一六五頁
 (3) 同右 一六七頁
 (4) 市古貞次「中世小説の研究」二二五頁・二五〇頁参照
 (5) 富倉徳次郎「平家物語研究」（昭和39年角川書店）四五二頁
 以下に鎌倉期延慶二年（1309）六月筆写本の写真影印ならびにその翻刻を収める。